

6. 六大学野球審判 —1961～62年—

ルールブック

学部学生時代に野球に熱中し、あまりにも勉強をしていなかったことを就職担当の国分先生に気付かされ、大学院修士課程に進学することになった。しかし、やはり野球から離れることはできなかった。六大学野球の審判を仰せつかったのである。1961年と62年の2年間務めることになる。六大学野球の審判は、各校のOB3名ずつが分担して行うことになっている。その一人に指名されたのである。

審判用の制服を支給された時は、自分も一人前の審判になったような気分になった。ほんの少しの研修を受けただけで、実戦に臨んだ。新米は球審をやらせてはもらえない。志願して他の方々があまりやりたがらない二塁塁審をやらせて頂くことにした。そのポジションは、試合を見るには最高の場所である。また、ファール・フェアの判定をしなくても良いので、投手が投げる時に緊張しなくても済む。

審判はルールを知っているのが最低の条件である。そこで、ルールブックなるものに初めて目を通した。私の常識と異なることは全く書かれていなかった。良くできたルールだと思い、以後試合の場には持参するが、目を通すことはほとんどなかった。選手からすれば、正しいジャッジをしてくれることが最もありがたいことである。少なくとも誠意をもって判定してくれているという信頼関係が重要である。これに関連して記憶に残る二つの出来事があった。

ストライキ

外野に飛球が上がると、塁審の1人がその行方を追っかけて、補球の有無を確認することになっている。センターの補球範囲に上がると二塁塁審がその役を行う。慶応の主将田浦君の打球がセンターの横に上がった。二塁塁審の私はそれを追い、センターが捕球できなかったことを確認して二塁の方を振り返った。打者走者が二塁に走ってきており、野手からの返球が一瞬早く、タイミングはアウトに見えた。しかし、これを判定するのは、一塁塁審の役目である。一塁塁審は、打者走者の一塁ベースタッチを見届け、走者と共に二塁に走り、ジャッジすることになっている。ところが、一塁塁審は一塁にいたのである。観衆も選手も一斉に私の判定に注目したが、私はタイムを宣言した。そして、審判に集まってもらい、相談した。私の意見どおりに、タイミングだけから判断するとアウトであるとの結論に落ち着いた。そこで、おもむろにアウトを宣言した。ランナーは一言も文句を言わず去り、前田監督の抗議もなく、チェンジとなった。守りについて慶応の北野二塁手は、今のは一塁の審判が判定するのですよね。と私を慰めてくれた。誠意をもってした判定に、慶応大学は、監督も選手も誠意をもって応えてくれた。だが、翌日の新聞には当時の世相を反映してか、審判も「ストライキ」といった私の行為を皮肉った記事が掲載された。

退場勧告

もう一つは、盗塁に関するジャッジの問題である。2死後、慶応の本郷選手が盗塁してきた。私はセーフの判定をした。ランナーもセーフだと思っている。ところが周りの二塁手や遊撃手はアウトで

あると叫んだ。この程度のタイミングの場合、アウトと判定する審判もいる。というのは、近くにいる選手はすべて、ランナーを除いて、アウトであることを望んでいる。それが判定に微妙に影響するように思われる。最近のテレビを見ていてもその印象は変わらない。この場合は特に問題はなく、次のプレーに進んだ。ところが、再び本郷選手が二塁に盗塁してきた。先程よりはさらに厳しいタイミングではあるが、やはりセーフと判定した。今度は三塁手の主将までが、二度目ですよと遠くからやじってきた。これは、六大学の選手にあるまじき振る舞いであると退場処分にし、私も審判を辞そうと考えた。そして、2、3歩そちらの方に歩きだすと、彼は突然神妙な態度に変わった。退場にはできなかつた。

これには伏線があった。東大OBとして、審判をされていた国武さん(私の2年先輩に当たり、審判も先輩)に絡む話である。彼は1塁でのクロスプレーの判定が正確であり、きわどくセーフである場合に必ずセーフと判定できる数少ない審判であった。ある時、それにクレームを付けた選手がいた。彼のアウトの判定に対して、何か捨てぜりふをはいてベンチに帰ろうとしたのである。国武さんは呼び止めて何か言っている。私はたまたま二塁の審判をしていた時のことであつた。何を言われたのですかとお聞きすると、「お前はそれでも〇〇大学のキャプテンか」と叱つたとのこと。

正確な判定

選手時代を振り返ってみると、福村主審は他の方より幾分低めをストライクにしてくれた。山本英一郎主審は、2ストライクの後であればアウトコースをボール半分はずれたところまでは必ずストライクとして三振をコールしてくれた。一方、郷司主審は、その球で三振となる場合には打者に甘く、四球となる場合には投手に甘かつた。また、多くの主審は、投手がストライクと思って投げたストライクゾーンの球は、必ずストライクにとってくれた。そして、試合の前半はやや投手に辛く、後半には正確になるというパターンが多かつた。審判も投手と同じである。いずれにしても、当時の審判はそれぞれに個性を持っていたにしても、誠意を持って正確な判定をしてくれたと、感謝している。それが、私の2度目の監督時代になると、審判の誠意や技術に疑問を抱くケースに何度かぶつかつた。現在はいつそうそれがひどくなっているように感じられる。残念なことである。